

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	仲 川 浩 世
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
英語ライティング指導における 内省的フィードバックの影響			
論文審査担当者			
主 査	教 授	深 澤 清 治	
審査委員	教 授	築 道 和 明	
審査委員	教 授	柳 瀬 陽 介	
審査委員	教 授	松 見 法 男	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文の目的は、学習意欲の低い中級未満の日本人大学生・短期大学生を対象に、第二言語ライティングにおける修正フィードバック研究を考察し、教員による学習者の内省を促す指導法を通して、ライティングの伸びと意識の変容を明らかにすることである。本論文の構成は次の通りである。</p> <p>第1章では、本論文の目的・問題の所在・論文構成を述べた。(1)日本人大学生の英語ライティング学習経験に関する調査から、大学入学前に十分なライティング学習の準備ができていないこと、(2)学習意欲の低い学習者を対象とした指導法はまだ確立されていないこと、(3)ライティング・フィードバック研究を日本語で紹介したものは不足していることを指摘した。</p> <p>第2章では、本研究の目的に即して先行研究の概観を述べた。第1節では、本論文における重要な用語を定義づけた。第2節では、ライティング・フィードバック研究の動向を述べた。その結果、ライティングにおけるフィードバックの有効性はすでに実証されているが、学習意欲との関連については調査が不足していることがわかった。そこで、第3節では、先行研究に欠如している学習者の内省について論じた。これらの先行研究を踏まえて、第4節では本論文の研究課題を4つ設定した。</p> <p>第3章では、本研究の予備調査を行った。第1節では、中級未満の日本人大学生のライティング学習に対する意識調査を実施し、調査協力者の意識の変容からどのような指導法が示唆されるかを考察した。第2節では、高校教科書と大学教材内のパラグラフ・ライティングタスクの特徴に着目し、その相違点克服のための支援方法を検討した。その結果、調査協力者は中級未満ということもあり、ライティングの基礎知識は理解しているが学習方略に問題を抱えていること、および将来的には、学術的なカリキュラム編成を求めていることがわかった。そして、学習意欲減退を防ぐためには、教員によるフィードバック支援と学習者の内省を導入することが望ましいと指摘した。</p> <p>第4章では、内省的な書き手育成を目指した指導モデル、Assisted Writing Approachを構築し、短期大学生のライティングの能力及び意識の変容を検討した。指導モデル内で</p>			

は、リーディング後にコンテンツを言い直させ、プロセス・ライティングへと導き、振り返りをさせた。そして、教員によるライティングの修正フィードバックと口頭による言い直しを提供し、振り返りには母語でコメントを与えた。また、指導前後のライティングの伸長を測るために、総語数と **Test of Written English (TWE)** の得点の変化を t 検定により分析したところ、どちらも有意に上昇し、さらに、ライティングに対する意欲も向上した。そのため、本指導モデルはライティングの能力の発達とともに動機づけにも効果的であると結論づけた。

第5章では、短期大学生のライティングにおける内省的フィードバックの効果を検証した。内省的フィードバックとは、「ライティングにおける、学習者の気づきを促す教員のコメント及びフィードバック活動のこと」と定義づける。第4章と同様に、ライティングとフィードバックを導入し、指導前後のライティングの能力と意識の変容を検討した。その結果、フィードバックに対する調査協力者の気づきが、言語面からライティング方略の問題点へと変容し、最終的には、動機づけも向上した。さらに、下位群の方が上位群よりもライティングの能力が伸びる傾向にあった。また、自分のライティングを振り返る学習者ほど、ライティングの能力を伸ばしたこともわかった。その上、自分自身で見直しをするうちに、学習活動に責任を持つ、自律した書き手に成長するということも明らかとなった。しかしながら、学習意欲が高くても、伸びなかった学習者も存在した。したがって、今後の課題として、伸びなかった学習者のための支援や心理面の分析が必要であると考えられる。

第6章では、本論文の総合的考察及び結論を述べた。本論文の2つの本調査の結果、学習者の内省を促す教員によるフィードバックを伴った指導の影響は次の通りである。指導モデル、**Assisted Writing Approach** と内省的フィードバックは学習者のライティングの能力と動機づけに貢献した。一方、伸びた学習者ほど、自分のライティングを振り返る傾向にあることもわかった。しかしながら、個人によって、フィードバックに対する志向も異なるため、今後は質的研究に重点を置く必要がある。

現在まで、多くのライティング・フィードバック研究が行われる中で、本論文の独創性は以下の三点にまとめられ、学術的及び教育的意義を評価することができる。

- (1) 対象を中級未満の学習意欲の低い日本人短期大学生に設定し、ライティング実践研究を実施したこと
- (2) ライティング・フィードバックの先行研究において、欠如している学習者の動機づけに焦点を当て、支援策となる指導方法を示唆したこと
- (3) 自分の誤りを自分で省みる内省的な書き手育成を目指した支援方法を探求し、その効果を検証したこと

本研究は、学習意欲の低い中級未満の日本人英語学習者に特化し、教員のフィードバック支援がライティングの能力の伸びと意識にどのような影響を与えるのかについて、今後の実践研究の枠組みを提示したもので、日本の英語教育において重要な教育的示唆となり、今後の課題を論じ得るものである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成31年2月12日